

支え合う力とジェンダー ～二年目の福島からの声～

早稲田大学内のジェンダー関連の教員・研究者が一堂に会し、意見や情報交換を行い得る場として2000年に設立されたジェンダー研究所は、毎年、一般にも開いて知見の共有や投げかけを行うシンポジウムの開催を重ねてきています。学内のジェンダー関連の授業を連携して担い、ジェンダー研究所として、2014年度は全学副専攻も立ち上げる、知の蓄積を行ってきています。



第13回を数える今年度は、東日本大震災・原発被災の苦悩を生きる福島のみなさんの声に、耳を傾ける試みがもたれました。

戸山キャンパス 33号館第一会議室の会場では、写真展「福島県楢葉町 私たちのいま... 3.11からの写真展@会津美里町...」、福島県富岡町の女性による芸術性高い織物作品展「おだがいさま工房」も同時開催され、教職員、学生、一般の方々と70名近い参集があり、3時間、傾聴し心を寄せました。



金井景子教育・総合科学学術院教授の進行で、文字による記録、映像による記録、ラウンドテーブルという方法論での被災地の支援者の声を聴くという記録、それぞれに取り組む、3人のパネリストの報告がなされました。

福島の実際を報告くださるパネリストのお話に真摯に耳を傾け、当事者の方が現実を語られる映像、福島の実実をきりとる写真の一葉一葉、福島を生きる女性の紡ぐ作品に見入る3時間でした。

遠藤恵 NPO 法人市民メディア・イコール副理事長は、「ジェンダーの視点から生まれた30人の声 - 福島的女性たちの3.11を記録して」として、発災から2年半が経過した2013年9月にまとめられた、「ふくしま、わたしたちの3.11～30人のHer Story」として、福島を生きる30人の女性の声を聴いてこられたその肉声、現状を報告されました。

映像作家の島田暁さんは、「震災と性同一性障害、セクシャルマイノリティ」として、作成された18分のドキュメンタリー映画『震災から1年被災地いわきからのメッセージ』を上映され、セクシャルマイノリティの問題を提起されました。

村田晶子文学学術院教授/ジェンダー研究所所長は、「支援者支援と大学の役割 - 福島県的女性支援者・地域コーディネーターの課題に向き合って」として、「同じ視点、同じ思い違う視線」という観点から、ラウンドテーブルの手法で、福島の支援者の支援に携わった報告がなされました。

後半、質疑応答が行われ、経験を聴き、記録し、のこしていく意義や、学生がうけとめる意義について再確認をしました。

若い聴き手があると、将来へバトンをつなぐことになると、スピーカーの方が熱をもって語られる、レイトカマーとして支援に携わるのを恥じることなく、学生や心を寄せる者が途切れなく続いていくことが大切ではないかと、金井景子教授が結ばれ、3時間のシンポジウムが終わりました。